

平成二十年度 学力検査問題

国  
語

(注意事項)

- 一 放送で指示があるまでは、開かないこと。
- 二 検査問題は、一ページから五ページまで印刷されています。
- 三 答えは、すべて解答用紙に書きなさい。





2 文章中の **B** に入る言葉として最も適当なものを、次のア、  
エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア だから    イ かなり    ウ しかし    エ たとえ

3 文章中に **C** 時代が変わればことわざの受け止め方だつて変化して  
いつてしまう とあるが、「可愛い子には旅をさせよ」ということわざ  
の場合、どのようなことが受け止め方に变化をもたらしたと筆者は考  
えているか。二十五字以内(句読点も字数に数える。)で書きなさい。

4 文章中の「百聞は一見に如かず」と同じ読みになるように、次の  
文中に返り点を書きなさい。

百聞 **ハ** 不 **ニ** 如 **シ** 一見 **ニ**

5 文章中の **E** に入る言葉を、筆者の「百聞」と「一見」について  
の考えがよく分かるように、十五字以内(読点も字数に数える。)で書  
きなさい。

6 この文章で筆者の言おうとしていることは何か。最も適当なものを  
次のア、エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 文化を正確に受け継いでいくためには、言葉のニュアンスの変化  
を許してはいけない。

イ 生活の文化をきちんと次の世代に伝えることが、美しい日本語を  
守ることにつながる。

ウ 情報化社会の利点を積極的に活用することで、若者の言葉の乱れ  
を正すことができる。

エ 言葉をどのように変えるかということは、ある国民やある民族が  
決めることではない。

## 六

次の文章は、主人公の「わたし(中学一年生)」が、時々行く竹の美術工  
芸館の中庭で、いつもとは違う竹の様子に気がついた場面から始まる。  
この文章を読み、あとの(1)～(6)の問いに答えなさい。

「えっ、あれはなに?」

一番奥に生えていたから**気づ**かなかった。ちよつぱり黄色っぽい古い  
竹の枝々に、小さなちようがと**まつた**ような不思議なものがついでに  
る。

「あつ、竹の花だ。」

(注) ささ竹が叫んだ。

「竹の花? 竹に花が咲くの?」

**聞いた**ことも見たこともない。まるで稲穂のようにびっしりとついて  
いる、あのつんつん飛び出しているちようのようなものが、竹の花?  
どこからどこまでが花なのか見分けがつかないし、花びらだつてどこに  
あるのか分からない。細かな葉がおし合いへし合いして飛び出した感じ  
の、不思議な花。ちつともきれいじゃない。

「すげえ、竹はさ、六十年に一度だけ、花を咲かすんだ。そして、そ  
のまま枯れていくんだ。」

ささ竹はひとり **A** している。

「枯れていく? じゃあ、花を咲かせて終わりになつてしまうの。な  
んだか哀れ。」

なんのために花を咲かすのだろう。さして、きれいでもない花のため  
に命を落とすなんて。

「花を咲かせて一生を終えるなんて、かっこいいよな。うん、絶対い  
い。」

ささ竹は、あわてて館長さん呼びにかけだしていった。

小さな竹の葉が、せまい袋からやつとぬけ出たようなかっこうで、顔  
を出した竹の花。これが青々とした美しい竹の、最後の姿なのだろう  
か。

そのとき、かすかな風が吹き込んで、ふるふると竹の花を震わせた。一瞬、無数の小さな黄色いちようが竹の花から音もなく舞い上がった気がして、わたしは思わず目を見張った。

竹の花をぎっしりとかかえた古竹が、ただサワサワと音をたてて、ゆっくりと揺れているばかりだ。

今のは……まぼろし？

頭の奥が、しびれたようにぼんやりしている。わたしは古竹に近づくと、そっと触ってみる。ひんやりと冷たい感触が手のひらに残った。

ドヤドヤとにぎやかな足音が聞こえてきた。

「本当なんですよ、本当に花が咲いているんですよ。」

ささ竹の弾んだ声が聞こえてくる。わたしは、落下するジェットコースターみたいに、いっぺんに現実を引きもどされた。

「ほう、これは、これは……。ここはもともと古い竹林だったから、こんなこともあるんだろうか。」

館長さんが、目を真ん丸にして竹の花を見上げて言った。

「竹の花を見た人は少ないはずだが。わたしがまだ若いころ、確か一回だけあった。竹の花の開花時期にはな、六十年説と百二十年説があつてな、ひそかに百二十年説がささやかかれておるんだ。」

「ひえー、百二十年なんていったら、一生のうちに出会えなくても不思議じゃないんだ。」

「そうだ。竹の花が咲いているのに出くわすことのほうが珍しいんだ。竹に花が咲くことさえ、知らない人がいるだろうな。」

館長さんは大きくうなずいた。

百二十年にいつべん咲く竹の花。人間の寿命よりも長い竹の一生。その命を生き抜いて、やがて枯れようとしているこの古竹。

もしかしたら、枯れつきる前に、ちように姿を変えて命を空に放つのもかもしれない。

「なんだか、とても満足そう。」

わたしは思わずつぶやいた。

「そうだ、竹は枯れて、また再びよみがえるんだ。強いものなんだよ。この大地の中に、もうすでにしっかりと根を広げ、新しい命を育てている。ひとくぎりをつけたってことだ。しかし、まさかここで竹の花を見られるなんて、不思議としか言いようがないもんだ。」

館長さんはしみじみと言った。百二十年といたら、わたしはこの竹の花を、もう二度と見ることはできないのだ。わたしは今、すごく不思議な場面に出くわしているんだ。

わたしは、まじまじと竹の花を見上げた。館長さんもささ竹も、黙って竹の花を見つめていた。

(熊谷千世子「あの夏の日のとびらを開けて」による。)

(注) ささ竹Ⅱ「わたし」の友人である佐々野真(中学二年生)の愛称。

① 文章中の~~~~(a・b・c・d)の四つの動詞のうち、一つだけ活用種類の異なるものがある。その符号を書きなさい。

② 文章中の **A** に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 緊張    イ 興奮    ウ 期待    エ 落胆

③ 文章中の **B** まぼろし とはどのような光景か。文章中から二十八文字(読点は含まない)で抜き出して、はじめと終わりの五字をそれぞれ書きなさい。

4) 文章中に わたしは、まじまじと竹の花を見上げた とあるが、この時の「わたし」の心情を説明した次の文の ① ・ ② に入る言葉として最も適当なものを、文章中から抜き出して、それぞれ書きなさい。ただし、① は二字、② は四字で抜き出すこと(それぞれ読点は含まない)。

竹がやがて古竹となり、花を咲かせて一生を終えることについて、はじめは ① と思っていたが、時には人間の寿命よりも長い時間を生き抜いて、新しい命を育て枯れようとする竹の生命力に心を揺さぶられ、② というまでに見方が変わっている。

5) 文章中から、「わたし」の意識の急激な変化が、比喩を使って表現されている一文を抜き出して、はじめと終わりの五字(句読点も字数に数える。)をそれぞれ書きなさい。

6) この文章についての説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

- ア 竹に花が咲いているという不思議な光景を通じて、現実と幻想との間を何度も行き来する主人公の内面を、細やかに描いている。
- イ 長い年月の間に一度だけ咲く竹の花に巡り合った主人公の感動が、植物への関心に変化していくことを、印象的に描いている。
- ウ 竹に花が咲くという光景に出会った主人公の心の動きを、竹の様子や登場人物の会話を織り込みながら、ていねいに描いている。
- エ 竹の花との出会いをきっかけに、主人公が閉ざしていた心を周りの人に少しずつ開いていく過程を、色彩感覚豊かに描いている。

七

次の文章を読み、あとの1～4の問いに答えなさい。

名人の新九郎、権九郎といひしころ、鼓を日ごと出精しけれども、いまだ心に落ちざる折から、年久しく召しつかひし老女、朝々茶持ち來たりて権九郎へ給仕しけるが、ある時、甚だ鼓上達しける由語りければ、A をかしき事に思ひて、わが職分の上達を知る訳をたづね笑ひければ、老女答へて、「親の新九郎の鼓数年聞きけるに、朝々煎じける茶釜へ音響き聞こえはべる。この折まで権九郎の鼓その事なく、この四五日は鼓の音茶釜へ響きけるゆゑ、B こそ上達を知りはべる。」と答へけるとなり。C 聞きし耳なれば、自然と微妙に善悪も分かるものと、権九郎も感じけるとなり。

(注1) 鼓 打楽器の一つ。手で打って音を出す。

(注2) 出精 精を出して励むこと。

(注3) 上達しける由 ここでは、「上達したということ」の意。

(注4) 茶釜 茶の湯または茶を煮出すのに使う釜。

1) 文章中に A をかしき事に思ひて とあるが、「思ひて」の主語にあたるものとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

- ア 権九郎
  - イ 老女
  - ウ 親の新九郎
  - エ 作者
- 2) 文章中の B を現代かなづかいに改め、ひらがなで書きなさい。
- 3) 文章中の C に入る言葉として最も適当なものを、文章中から抜き出して、四字(読点は含まない。)で書きなさい。
- 4) どのようなことをきっかけとして、老女は権九郎の鼓が上達したと思ったのか。二十五字以内(句読点も字数に数える。)で説明しなさい。